

2020年度(令和2年度)
カラ事業報告書



黄色のTシャツが可愛いバグ小学校の生徒と教師。

2020年度 カラの活動について

マリの現場に行くことが出来なくなってから3年が過ぎました。あの村はどうなっているのか、今までの活動は村の人たちの生活に上手く有効に活かされているのだろうか、とあれこれ思うことが多くなりました。

現地スタッフとのメールでの連絡も度々の停電でなかなか届きません。そんな状況に追い打ちをかけるような新型コロナウイルスの猛威やクーデター発生でした。日本のテレビでは世界のニュースの報道は多くはありません。特に日本から遠いアフリカの状況は伝えられない事が多いのです。

2020年8月に発生したクーデターが一旦収束、暫間政府が組織され民政移管を目指していましたが、内閣改造に不満を持つ副大統領と軍の幹部により、2021年5月25日に再びクーデターが発生し、6月6日現在も無政府の状況です。その為、マリ国民の生活は物価の上昇や停電、水道の配出量の減少などが続き非常に困窮しているとのことです。

そして新型コロナウイルス感染についても、昨年最初のクーデター発生時はコロナ禍に見舞われているにも関わらず、群衆が密集してクーデターに参加、またモスクでは人々が重なり合うように祈りを捧げていました。「我々はコロナなどには感染しない」というカラの活動現地の村人たちも多く、疫病への認識が低く心配していましたが、国の啓発教育が功を成したのでしょうか、日本と同様に一時的に感染者数が減少しました。しかし2020年末頃からは(これもまた日本同様に)また増加となりました。

イギリスからワクチンが入りましたが量が少なかった、ということもあったようです。先日の連絡ではカラのスタッフは既にワクチン接種が終了、「日本はまだか?」と聞かれます。カナダ在住のカラの元スタッフも2021年2月にワクチン接種が終わったと言っています。カラの活動地域でのワクチン接種は、クリコロ郡からの要請でバブグ村診療所が会場として使用される見込みです。

この報告書を作成している現在も私はまだ接種を受けていません。日本のこのような現状はそのまま発展途上国に対する我が国の支援の在り方にも似ているように思います。「知識は豊かであるものの有効な実践が伴わない」と感じています。

今回の表紙写真について

今回の表紙を飾る写真はバブグ村小学校の生徒たちです。彼らは盛岡市から寄贈された2019年盛岡マラソンのTシャツを着て、とても満足しています。日本から発送したものの、なかなかバマコに到着しないので半ば諦めていましたが、約6ヶ月もかかってやっと到着しました。後に送られてきたこの写真を見て驚いたのは、大半の生徒たちがしっかりとマスクをかけ新型コロナウイルス感染を予防していることで、先生も黒いマスクをつけています。



実は、私はバブグ村のような小さい村ではマスクなどは使っていないと思っていました。私は村の人たちとの長い付き合いの中で、一体何を見ていたのか? と改めて感じました。このTシャツについての謝礼の手紙がバブグ村から届きました。その内容は「バブグ村小学校の生徒たちへ暖かいお気持ちで盛岡マラソンのTシャツをお送り下さりありがとうございました。バブグ村村長、小学校自主管理委員会、校長、子供たちの両親からお礼申し上げます。このTシャツは生徒たちにとっては制服のように大事なものであり、勉学に励むためのものとなりました。お礼のご挨拶といたします」としたためてありました。

私はこの小学生たちの写真を見て大きなことに気が付き、反省した事があります。それは、カラが長い間村

で人々に衛生と病気予防の知識普及の際に「マスクで感染を防ぐ」ことを指導内容に含めていなかったことです。マリでもマスクを使用するのは男性、特にバイクを運転している人が、乾季のものすごい埃を避けるため、運転の際に使用しているだけで、日本のようにマスクをする習慣がないのです。病気予防の話をする時にマスクの効用を話し、作り方も女性たちに指導するべきであった、と今更ながら反省し後悔しています。まだまだ支援も半ばの状況のように感じます。

村に移管した活動のその後

カラが建設した産院や診療所等は順調に村人に使用され続けています。女性の病気予防や衛生知識普及の学習会も行われているようです。しかし、すべての行動や活動は新型コロナウイルスに左右され、女性センターでの活動は作業時間が短縮され多少の困難を伴っているということです。

2020年度のマリ現地における活動は、会員の方々のご寄付や年会会費、そしてマリ柔道選手のホストタウンである盛岡市の青年会議所さんのご厚意により、以下のような事業が出来ました。これまでとは違い資金も少なく小規模となりましたが、現地の村人たちの生活を確実に支えています。遠く離れた東京から村の人たちの笑顔や美しい緑の中で働く姿、学ぶ姿、そして雨季の到来を告げる赤い虫の発生、一度の雨で孤立してしまう村の景色などを想像し、懐かしく思っています。

識字教室の完成

2020年度には識字教室が3ヶ村に建設されました。

JCI MORIOKA(盛岡青年会議所)さんのご寄付によりシラブレ村女性識字教室が、WF基金さん(2019年度助成金)とカラ会員(以後、会員と略します)の方々の年会費とご寄付による資金でシンザニ村女性識字教室が、そして会員の方々のご寄付でバンザンドウ村識字教室が建設されました。

特に盛岡青年会議所さんは、城下町盛岡市の古い町並みを今に残す材木町で毎週開かれる夜市で、行き交う人々へ直接呼びかけ、クラウドファンディングを利用して資金を調達してくださいました。実際に街角に立って呼びかけた方々のお話では、ご寄付くださった方は、中年の女性が多かった、ということです。きっとアフリカ農村部の女性への支援、それもこれから文字を学ぼうとする女性たちへの励ましの意味を込めてのご寄付であろう、と想像して感謝しております。

村で建設される識字教室は通常たった1部屋(4m×7m)で、飾りのない雨風をしのぐだけの非常に質素な建物です。雨季に入っている現在は主食のトウジンひエの作付けが始まっているために休講していると思いますが、その他の季節は有効に使用されています。村の女性のみならず、村全体の財産として長く使用されて行くことと思います。



盛岡青年会議所さんのご寄付で完成したシラブレ村識字教室正面



識字教室内部。たくさんの女性たちが集まっています

井戸の掘削

以前カラでは2種類の井戸を掘削していました。しかし現在は職人の手掘りによる井戸、つまり浅井戸を設置しています。この井戸は、機械掘で地下水脈から水を汲み上げる深井戸とは異なり、地下に溜まった水を汲み上げる井戸です。それぞれ長所短所がありますが、浅井戸は村人がケア出来るうえに、深井戸に比べて経費も安価で済みます。しかし水の有無は掘ってみなければ分からない、という非常に苦勞を伴う事業です。

2020年度は、4ヶ村(ファニネゲタブグー村、セリブグー村、ニヤマコロブグー村、ドゴ村)に浅井戸が掘削されました。この資金はWF基金(2020年度助成金)と会員の方々の年度会費によるものです。井戸の掘削は深く掘っても水が出ない場合もあり、水が出るまで非常に心配させられますが、今回は問題なく25m前後の掘削で水を得ることが出来て安心しました。

通常浅井戸の掘削は、セリブグー村に住んでいるバコロバサコというベテランの井戸掘り職人に依頼しています。カラは1995年から彼にもう何十本という浅井戸の掘削を依頼しています。彼はセリブグー村の識字教師でもあります。浅井戸は深く掘るだけでなく、水が出始めたら掘った井戸の壁面の土が崩れないようにセメント製の枠を一基ずつ挿入していき、更に掘り下げていきます。

このセメント製の枠も、バコロバサコの指導で時間をかけて村で製造します。これらの作業には、大勢の村の男性が手伝い、製造に必要な水は女性たちが井戸からくんで運びます。日数をかけて出来上がったセメント枠を一個ずつ井戸に下す時は、多くの男性が太いロープで、かなり注意深く井戸の底で待っている井戸掘り職人のところに静かに下ろしていくのです。以前スタッフが重量を計算したら、1個のセメント枠は800kgということでした。危険を伴う非常に大変な仕事で、カラで掘削する浅井戸はすべてこのようにして完成されます。この井戸の水は必ずしも清潔とは言えませんが、感染症予防には過酸化水素水を混入して飲用します。井戸の管理は各村で行いますが、隠居状況の老人が井戸の見回りを担当し、1日に何回も見回っているということです。

聞くとところによるとバグ村は、非常に豊富に水が出る井戸があったので親戚が集まって住み始めたのが村ができた始まりということです。それだけに「水は命」と言われて大切にされています。



完成したニヤマコロブグー村の浅井戸、これと同様の井戸がチェンチェンブグー村野菜園にも掘削されました



浅井戸の中に挿入する井戸枠。セメントで製造しています

野菜園の造成

久しぶりにチェンチェンブグー村に女性野菜園を造成しました。この造成費は会員の方のご寄付によるものです。金網製の家畜除けの防護柵は、バマコの業者が作業を始めて1週間で完成しました。しかし、この野菜園で絶対的に必要な水を得るための浅井戸は掘削が進んでもなかなか水が出て来ず、22m掘削した時点で「25mまで掘削して水が出ないようなら諦める」と井戸掘り職人からの伝言があり、とても心配していました。しかし数日後に「25m地点で水が出た!」という報告を受け安心しました。雨季の現在はキュウリやマクワウリ、ジャハトウなどの野菜を栽培しています。この地域の菜園は1997年に造成した5km北のバナニ村野菜園だけでしたから、周囲の村にとってはこれまでよりも食材も豊かに、そして女性たちにも収入が入ると期待しています。

カラマリの活動状況

既にカラマリが契約している事業の費用は未だに助成を受けられていないのが現状です。新型コロナウイルスの感染が収まらないこと、そして再度発生したクーデターが影響しています。先の2020年に発生したクーデターが収まった後に組織された内閣に対し、副大統領と軍幹部によって引き起こされたクーデターということです。暫間政府の大統領と首相は大統領府のあるカチに監禁されている、ということのマリスタッフがメールで連絡してきました。彼が最後に「マリには未来が無い」と書いてあった言葉が気がかりです。コロナ禍で生活苦にあるバマコ市の主婦たちが収入を得る手段として、カラが指導を頼まれている事業も未だ資金が入らないので実施されていません。5年間にわたる女性の自立を含む自然保護の事業もまだ始まっていません。

2020年度(令和2年度)収支決算のご報告

2020年度(令和2年度) カラ会計報告		(円)	
収入の部		支出の部	
2020年度会費	780,000	マリ事業費	
寄付金	3,155,113	建設費・管理費・人件費	2,722,453
助成金(WF基金)	200,000	日本事業費	
販売収入	41,500	管理費・人件費・交通費	
		・通信費・事務用品費、その他	638,964
		広報費・	
		からばす、年次報告書作成費	
		(印刷・レイアウト)	63,200
預金利息	4	マリへ銀行送金手数料	22,500
		会費入金手数料郵便局	7,400
計	4,156,617	計	3,454,517
2018年度繰り越し	636,993	次年度へ繰り越し	1,339,093
合計	4,793,610	合計	4,793,610

同連いのちの確記いしは、
2021年5月29日

三菱 UFJ 銀行年度末残 721,663 円
ゆう貯銀行 年度末残 558,982 円
年度末現金残 62,172 円
使途不明金 3,724 円

滝口洋子
神山明子

2021年度マリにおける事業予定

①識字教室の建設 2教室

ブラジェ村: 予算はWF基金、SI(国際ソロプチミスト)札幌、カラ会員年会費・寄付金を充当(予定)

ジョリ村: カラ会員寄付金と充当(予定)

②女性野菜園造成: セリブグー村へ野菜園の造成

この野菜園は昨年度に掘削された浅井戸を利用し、2021年度は金網の防護柵(0.5ha 300m)のみ設置する。資金はカラの会員の年会費と寄付金を充当する。

2020年度(令和2年度)事業の報告

日本国内での活動

*数多くの講演会や東京・盛岡でのカラコンサート、その他記念式典が予定されていましたが、中止となりました。

5/27 盛岡青年会議所理事長さんの電話インタビューに対応。

7/30 盛岡青年会議所にてマリでの活動について説明会(盛岡青年会議所)

9/19 国分寺市国際協会 国際理解講座「世界を知ろうシリーズ」にて講演 (国分寺市本多公民館)

12/14 盛岡青年会議所さんからの識字教室建設資金贈呈式(盛岡市役所)
「マリ料理を楽しむ午後のひととき」盛岡市役所佐藤玲奈さんのマリ料理をいただきながら
盛岡二高生数人との語らい。(盛岡市役所)

2021.3/30 マリ柔道選手ホストタウン招聘についての打ち合わせ会(大久保純代、榎本肇さん同行、盛岡市役所)

年次報告書編集に当たって

毎年事業の報告をお伝えしてまいりましたが、皆さまご承知のように村上は現地へ行くことがかなわず、お伝えできる情報が少ない状況です。

マリ・バマコのカラスタッフとは常にメールで、また村のスタッフとはバマコのスタッフ経由で携帯電話で連絡を取り合っていますので、日本に返事が届くには時間がかかります。またバマコ市は停電が多く、なかなかメールが届かない状況です。状況が穏やかになり次第早速マリへ出かけるつもりでおります。

2020年度年次報告書の最後に、大変身に余る事ですが、選にはもれましたが、2020年ノーベル平和賞に推薦されたことをお伝えいたします。これも皆さまのお蔭で支援事業を継続してこれた結果、と感謝いたしております。

カラ西アフリカ農村自立協力会 <http://ongcara.org/>

代表:村上 一枝

東京事務局

〒177-0054

東京都練馬区立野町7-9 クリオ吉祥寺壺番館101

Tel:03-3929-5767

E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局

BP E367 BAMAKO MALI

Tel:223-2020-9096